



わかば
「心やさしく 瞳輝かせ 学び合う学校」

校長 井土 満

TEL 042-536-3971

FAX 042-534-6943

http://www1.m-net.ne.jp/wakabas/

Eメール wakabas@m-net.ne.jp

きょうちくとう
爽竹桃の思い出

いづち みつる

校長 井土 満

若葉小から立川第九中学校の校舎や体育館が見える。その九中の一番北側、家庭科室のウラに爽竹桃(キョウチクトウ)の木が1本ある。だいぶ刈り込みをされているので樹形は悪いが、今夏も花を咲かせた。

この木は、今から20数年前に、私が植えたものである。

私が九中に就職した年、旧ソビエトのチェルノブイリ原子力発電所の事故があった。それがきっかけだったのか、平和教育の流れだったのか、修学旅行の行き先は「ヒロシマ」になった。

戦争や原子爆弾のこと、原子力の利用、原発事故のことなどを1年生から学習し、3年でヒロシマの地を訪れる修学旅行だった。広島では、原爆ドームに面した旅館に宿泊し、原爆資料館の見学や平和記念公園の散策、慰霊碑の前での慰霊集会、そして、被爆体験者のお話を聞く会などをおこなった。

被爆者の方のお話を聞く会は、記念公園内の、被爆者の方の思い出の碑の前でおこなわれていた。お話をしてくださった方(語り部)の中に、沼田鈴子さんがいた。

沼田さんは、21才の時、爆心地から1.3キロの地点で被爆し、がれきの下敷きになった。救出される時左足を太ももから切断された。婚約者も戦死し、絶望から死を考えていたとき、原爆で黒焦げになっても芽吹くアオギリの生命力に感動し、生きる意欲を取り戻したという。沼田さんが子どもたちに被爆体験を話しをする場所は、被爆アオギリの木の下と決まっていた。自分の被爆体験を語り、平和の尊さを訴え、話を聞いてくれた証に「被爆アオギリ」の種から育てた苗を子どもたちに渡していた。

その沼田さんが、この7月に89才で亡くなられたとの報に接した。福島原子力発電所の事故を聞いてから食欲がなくなり、体調が戻らなかったそうだ。



語り部の沼田さん

修学旅行で沼田さんの話を聞いていたときのこと。アオギリから鳩が飛び立った。鳩のフンがボタボタと2、3人の女子生徒の真っ白なブラウスに降りかかった。私は「ハッ」と息をのんだ。が、その生徒も、周りの生徒も、チラッとそれに目を落としたが、何事もなかったように沼田さんに目を向けなおし、話に耳を傾け続けた。その真剣なまなざしを、その場面を、私は忘れられない。

そのとき沼田さんからアオギリの苗をいただいた記憶はないのだが、九中の爽竹桃は、他の語り部の方からいただいたもので、私が広島から持って帰ってきて、そこに植えた。

当時、教員の私ですら、チェルノブイリの事故は遠い国のお話と感じていたし、原爆の話も遠い昔のことだと感じていた。ましてや、まだ中学生だった子どもたちは、どんなことを感じていたのだろうか。福島原発事故で出された放射能の量は、広島原爆の数十倍とも、百数十倍ともいわれているが、そのような、今の日本の現状をどうみているのだろうか。

沼田さんが子どもたちの心にまいた種は、どんな風に育っているのか。心のどこかに、あの爽竹桃のように、形は悪くともしっかりと根付いて、沼田さんや福島の人たちの心の痛みを、我がことのように感じているだろうか。

そして、私は、これからの子どもたち、若葉小の子どもたちに、どんな種を蒔けばいいのか…。

節電や食品の放射能汚染のニュースが流れる、いつもの年より暑く重苦しい今年の夏の終わりに。まだ、迷いの中にある。